

照葉樹林文化の基盤をなす自然環境 (第1報)

南川 幸

Natural Environment Forming the Basis of 'Laurel Forest Culture' (I)

Miyuki MINAMIKAWA

はじめに

近年、藤ノ木古墳、吉野ヶ里遺跡など相次ぐ発掘などで、日本列島は古代史ブームにわいている。これらからの出土品より縄紋文化という名で呼ばれている日本の原始文化をはじめ日本固有文化の淵源に遡り、そのものの根源を確かめようとする志向が強くみられる。また、われわれ日本人を日本人たらしめている諸文化の源像を探究する志向も諸分野にわたって顕著になってきている。

日本人を日本人たらしめている文化の特徴について石田英一郎(東大文化人類学)の「永遠の日本人・1957」のなかで日本文化の起源、大野晋の「日本語の起源」、村山七郎・大林太良の「日本語の起源・1973」、西田竜雄の「日本語の系統を求めて・1976」、大野晋の「日本語の成立・1980」などをはじめ日本語の起源と系統論について、日本語のルーツを考えられており、また、石田・江上・岡・八幡の「日本民族の起源・1949」をはじめとして「日本文化の基礎構造をめぐって諸説が提案され、また、柳田国男の「海上の道・1961」などより、日本文化の起源についての論議が展開されてきた。それと呼応して、「永遠の日本人」が発表されて間もない頃に、中尾佐助は「栽培植物と農耕の起源・1966」において、植物生態学や栽培植物と民族学の成果を総合した、いわゆる境界領域に新しい学説を展開した。すなわちヒマラヤ山脈の南東部の高度1500~2500mほどの地方に、日本のそれときわめてよく似た常緑のカシ類を主とした森林があり、そこからこの森林は、アッサム・東南アジア北部の山地、雲南高地、さらに揚子江の東側(江南地方)の山地をへて日本の西南部に至る東アジアの暖温帯の地帯にひろがっており、この森林を構成する樹種はカシ類・シノキ・クスノキ・ヤブツバキなどを主としたもので、いずれも常緑で樹葉の表面がツバキ類のように光っているので照葉樹と呼ばれている。この照葉樹林帯には多くの民族が住んでいるが、その生活文化のなかには数多くの共通の文化要素が存在すると述べている。また、中尾は茶の葉を加工して飲用する慣行、カイコのまゆから糸をひいて絹をつくること、ウルシノキやその近縁種の樹皮を用いて漆器をつくる手法、こうじを用いて酒を醸造すること、ワラビ、クズなど野生のデンプン多含有植物やイモ類、ヤシなどの堅果類の水さらしによるアク抜き法、柑橘とシソ葉類の栽培利用、コウジを用いた醸造法、さらにアワ・ヒエ・シコクビエ・モロコシ・オカボなど大量の雑穀類を栽培する燃畑農業によって生活が支えられてきたことである。

このような物質文化・食事文化のレベルにおける共通性が文化生態学的な観点から追求されてきたほか、この地帯には神社・儀礼の面においても、さまざまな共通の文化が存在することが比較民族学の立場から解明されている。このような照葉樹林文化論的な考え方は、日

本文化論にも充分対応でき得るものであり、日本文化のルーツ (Roots) を求める際のきわめて有力な手掛りの一つになり得るものと指摘されている。このような照葉樹林文化論なる学説は、照葉樹林帯域の現地調査によって得られたデータを基礎にして、そこで得られた民族文化のさまざまな特色を厳密に比較分析することによって、展開された学説であり、植物生態学や栽培植物と民族学との境界領域において成立した学説であるといえよう。

本学生活科学研究所が開所以来鋭意実施している国内調査の延長として行い、多大の成果と広く評価を受けた海外調査に続いて、1980年以来、照葉樹文化について調査研究を計画推

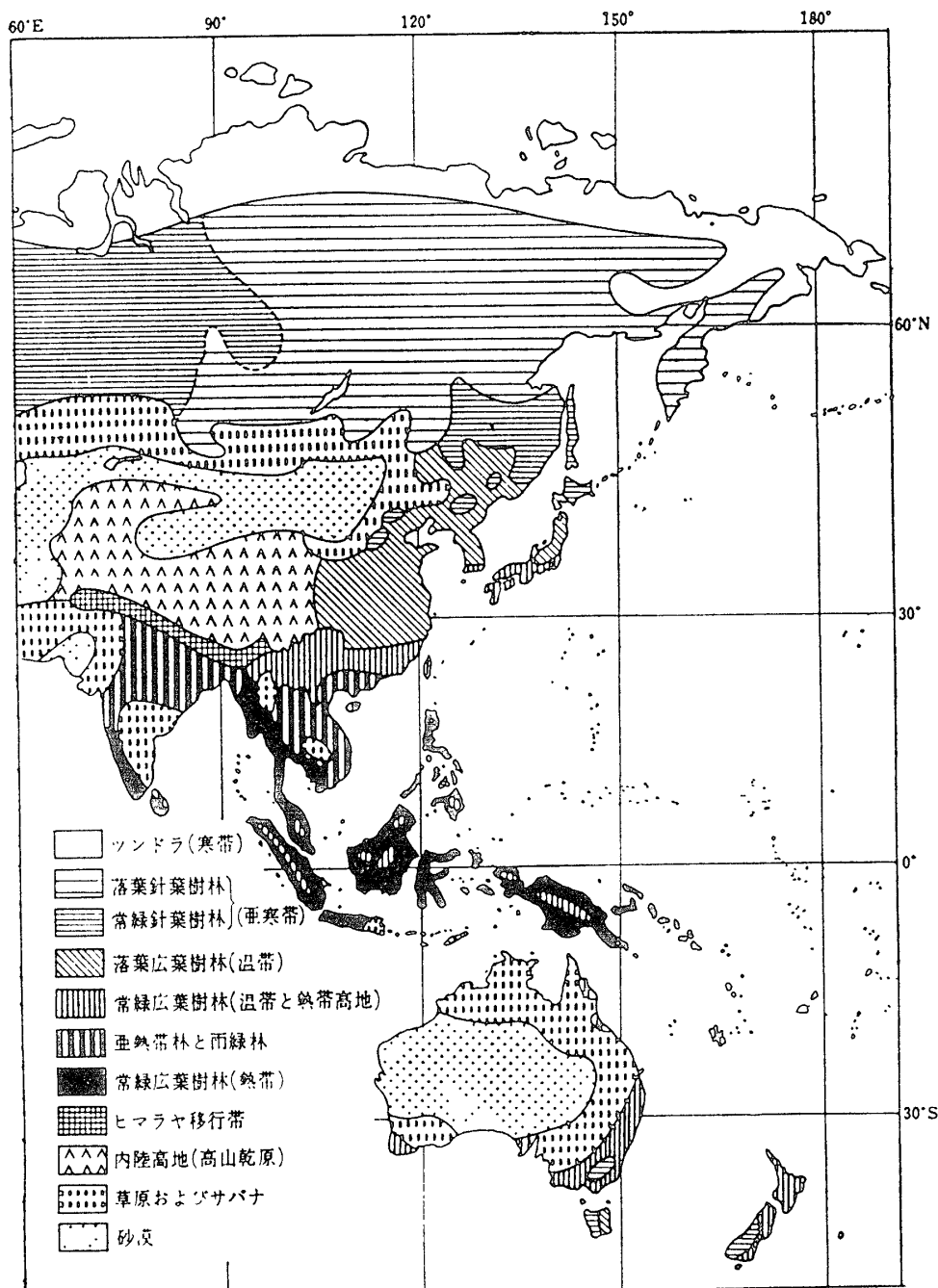


図1 ユーラシア東部からオーストラリアにかけてのおもな植生タイプの分布
 Fig. 1 The distribution of the major vegetation patterns ranging from the eastern part of Eurasia to Australia

進している。すなわち照葉樹林帯域に属する中国の雲南 (Yunnan)・貴州 (Guizhou)・福建 (Fujian) などの各省, 韓国の済州島 (chejudo), 台湾などをはじめ, 国内における照葉樹林帯域に属する西南日本各地における物質文化・食事文化およびその基盤となっている自然環境などについて基礎調査を進めてきた。特に原始的文化の名残りを比較的よくとどめているといわれている照葉樹林帯域における少数民族といわれる人々の生活域を中心に文化生態学的な視点から調査が進められてきた。

本項においては照葉樹林文化の発達成立している地帯, いわゆる照葉樹林帯域, その地域を形成している気候条件, 自然植生の概要について述べる。

1. 照葉樹林帯 (laurel forest zone, 独 Lorbeerwald) の気候条件

照葉樹林帯文化の発達する地域である照葉樹林帯域は, 葉がヤブツバキ・クスノキ・ヤブニッケイ・タブノキなどのように, 寒冷などやや不適応な季節に耐えるため葉は小形になり, 革質で厚く, 表層に体表を機械的に保護し, 内部からの水分蒸発を防ぎ, 外部からの物質の侵入を調節するため表皮細胞, または上皮細胞が外表面にむかって物質を分泌して形成したクチクラ層 (cuticle layer) がよく発達して光沢があることより照葉樹と称する常緑広葉樹を優占種とした常緑広葉樹林 (evergreen broad-leaved forest) の一つのタイプである。

照葉樹林は亜熱帯 (subtropical zone) と冷温帯 (cool temperate zone) の間に成立する気候帯に成立している常緑広葉樹林で, 世界中で東亜にのみ出現している。その典型的な発達域は, 図1のように, 日本列島の南半分の低地, すなわち西南日本の沿岸地域から平野・丘陵をへて山地の中腹, 朝鮮半島における南部の低地, 台湾, 中国の中・南部, すなわち華南地方などで, その西方への連続は温潤な東部ヒマラヤの上部山地林地帯に達している。

世界における照葉樹林を含む植生 (vegetation) の分布の位置をマクロな植生分布としてみたものは Troll (1956, 1961) が区分した24の典型植物気候型に整理した植生帯, 乾湿度と温度の2つの座標に配列した stocker (1963) の植生帯などがある。なお, Troll による三次元的植物地理学 (dreidimensionale pflanzengeographie) によった乾湿度の系列では最大湿潤域にそって, 標高と緯度の軸に植生帯のシエマを入れてみると図2 (stocker) のようになっていることがわかる。このように北半球と南半球とでは植生帯は対照的ではない。また, 世界の気候と植生構造との対応を考慮した気候区分については古典的な KOPPEN による樹林気候の A (熱帯多雨林気候), C (温帯多雨気候), D (冷帯気候) など最寒月の平均気温や最暖月の平均気温で区分し, 乾燥により樹木の生育を制限する無樹木気候, 乾燥気候, 低温で樹木の生育を許さない寒冷気候に区分されている。さらに平均気温と降水型の二つの要因の組合せによる樹木気候, すなわち降水型 (年間に平均的), W (夏雨型), S (冬雨型) の3つに区分されている。次に生態学気候区分として日本列島をはじめとし, 広く用いられているものとして吉良竜夫 (1948) が気候区分の指標 (index) としたものは, 温量指数, 寒さの指数および乾湿指数の三つの指数がある。温量指数は月平均気温 5℃以上の月の平均気温から 5℃を引いた数値を加算したもので, これは植物の一般的な生理的活動が 5℃以上にあること, 植物の生育については積算温度が重要であるという事実にもとづいているものであり, 寒さの指数は月平均気温 5℃以下の月について, 5℃以下の部分を加算し, それにマイナス記号をつけたものである。これは樹木の生活を止めるような低温がどれだけ持続するかを表すことに主たる着眼がある。乾湿指数は, 温度環境の指数にくらべると複雑で, 体系的には完全には一貫性のない方法で算出されるもので, 次式のように算出される。乾湿指数 (K), 温量指数 (T), 年平均降水量 (P) とすると, T が 0 ~ 100度とすると
$$K = \frac{P}{T + 20},$$

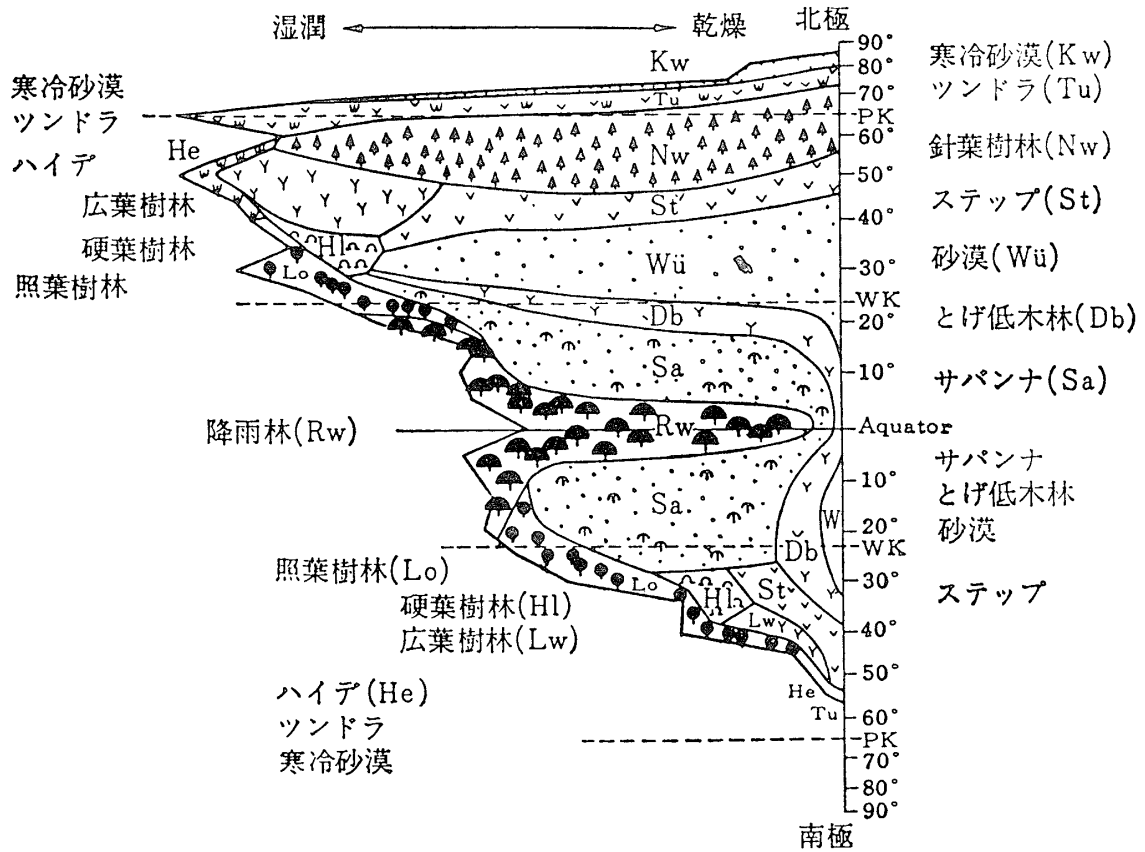


図2 二次元的で水平的な植生帯 (Stocker 1963)

Fig. 2 The vegetation zone in the moistest region represented two dimensionally with the height above sea level

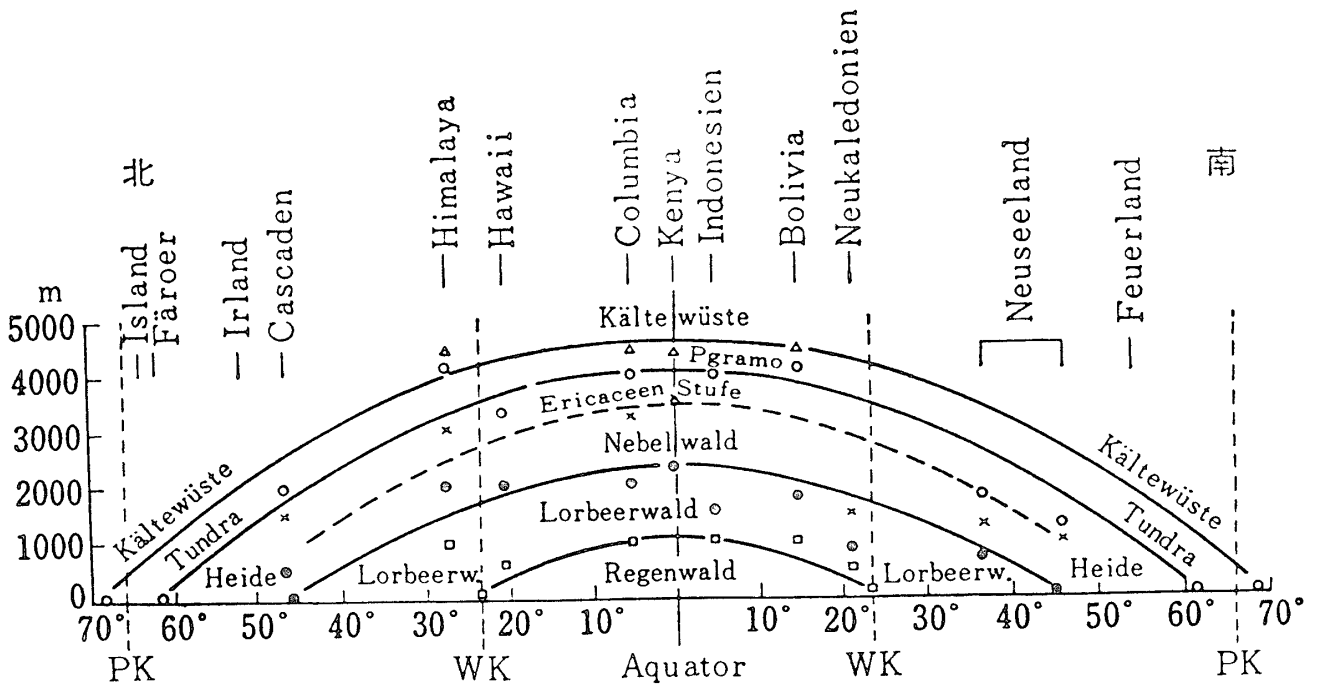


図3 最大湿潤域での標高をいれた三次元的植生帯 (Stocker 1963)

Fig. 3 The vegetation zone represented horizontally and three dimensionally

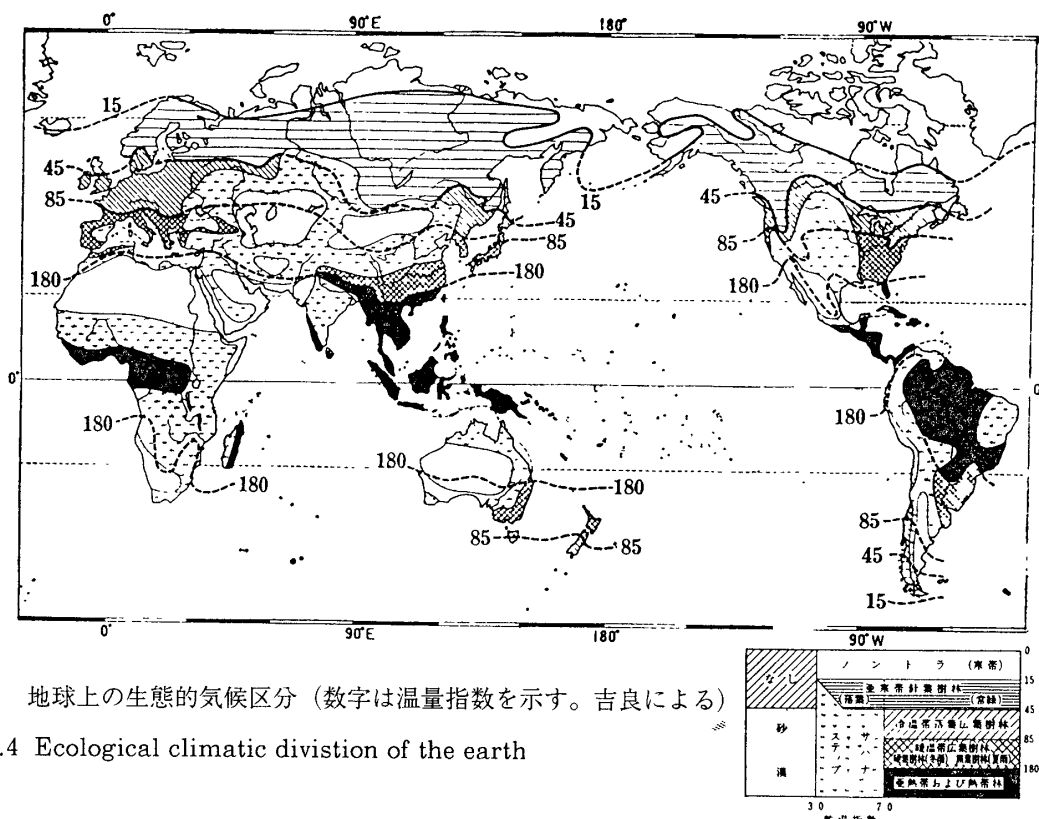


図4 地球上の生態的気候区分 (数字は温量指数を示す。吉良による)

Fig.4 Ecological climatic division of the earth

100~200度の場合は $K = \frac{2P}{T+140}$ として算出されたものである。このような温度および水分環境の組み合わせで、7つの大きな生態的気候区分を認めている。すなわち寒帯(ツンドラ)気候は温量指数15度以下の地域に、亜寒帯(亜寒帯針葉樹林)気候は温量指数45~150の間で、乾湿指数5.0以上の地域に分布している。また、冷温帯落葉広葉樹林気候区が45~85度、暖温帯照葉樹林気候区が85~180度の間で、180度以上が熱帯および亜熱帯林気候となり、両者の境界は240度ぐらいのところにあるとし、温帯~熱帯地域の乾湿指数3.0~7.0はサバナおよびステップ気候、3.0以下は砂漠気候である。次に世界的次元で照葉樹林帯を考えるものとして表1に暖かさの指数による植生と気候帯について掲げる(吉良・1945による)。

気候帯	暖かさの指数	植生帯	冷温帯	(45~55)~85	落葉広葉樹林帯
熱帯	240以上	熱帯降雨林帯	亜寒帯	15~(45~55)	常緑針葉樹林帯
亜熱帯	180~240	亜熱帯降雨林帯	寒帯	0~15	ツンドラ帯
暖温帯	80~180	照葉樹林帯	極帯	0℃	(氷雪)

2. 照葉樹林帯の植被 (Vegetation cover)

アジア大陸の東側、とくに東アジアでは、南支から台湾、琉球列島を経て西南日本にかけての地域に、亜熱帯性の常緑広葉樹林と暖温帯性の常緑広葉樹林が気候帯に対応して成立している。これは、一般に、南部の亜熱帯降雨林と北部の照葉樹林に区分されている。

このうち、亜熱帯降雨林は一般に、森林の高さは35m内外で、熱帯降雨林が45mないしそれ以上の高さをもった常緑広葉樹で、きわめて多くの樹林が密生し、林冠最上層は絶対優占種はみられず、普通林冠を構成する樹種の2/3以上が別々の種よりなり、連続した林冠層は通常樹高30m内外で、その上に超高木が突出しているのに対し、亜熱帯降雨林は連続した樹冠層の上に突出する超高木はまれで、林冠は2~3層化し、つる茎植物や樹幹の着生植物は熱帯降雨林に比して少ないが、照葉樹林に比べれば著しく豊富であり、滴下先端の葉を有

している種が多い。この樹林帯は他の諸群系林に比べて小規模であり、ブラジル南部・アルゼンチン北部・フロリダ・オーストラリア東部・中国南東部などに分布が確認されている。

次に前に述べたように、中国の中・南部，すなわち華南地方から台湾，朝鮮半島における南部の低地，日本列島の琉球列島を経て日本本土の西南部にかけてはあきらかに熱帯林とは区別される常緑広葉樹林が発達している。その森林構成種は概して高木層にクスノキ・カシ類・タブノキ・シイノキ，亜高木層にヤブツバキ・モチノキ・カクレミノ・イスノキ・サザンカ，低木層にアオキ・ヤツデ・ヒサカキ・マサキなどが多く，中国や台湾ではマテバシイやクリガシ類もおもな構成樹となっている。

日本の照葉樹林としては，琉球から本州の福島県と新潟県の沿岸域まで分布するが，日本の照葉樹林は植物社会学的には常緑植物のヤブツバキ・スダジイ・ヒサカキ・テイカカズラ・ヤブコウジをはじめベニシダ・イノデ類などのシダ植物などを標徴種としたヤブツバキクラス (*Camellietea japonicae*) といわれている。種類組成上2タイプに分類することができる。その一つは屋久島・種子島・琉球列島などに成立するスダジイ・リュウキュウアオキオーダーで，リュウキュウアオキ・シシアクチ・オオシバモチなどを特徴種とする亜熱帯性のシイノキ林である。もう一つは広く九州以北の西南日本から北陸・東北地方の沿岸まで分布成

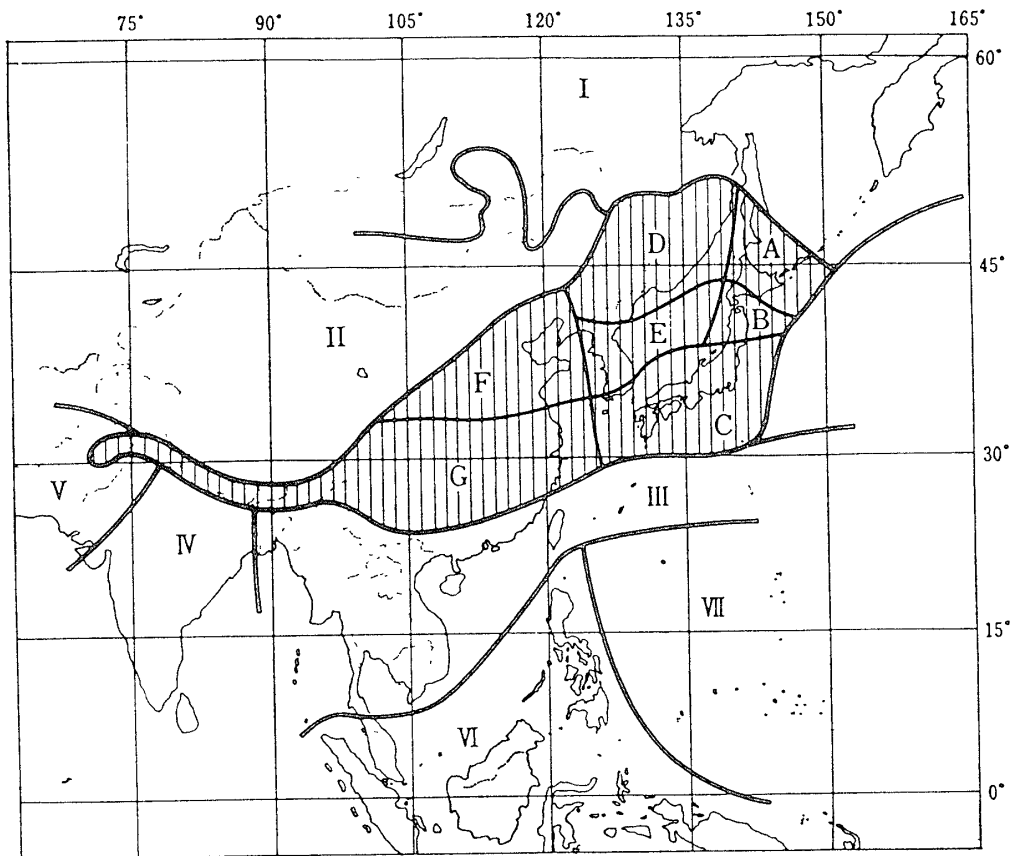


図5 日華区系(縦線域)と近接した植物区系(北村, 1957)

- I. ヨーロッパ・シベリア区系, II. 西及び中央アジア区系, III. 東南アジア区系,
 IV. インド区系, V. アフリカ・インド砂漠区系, VI. マレーシア区系,
 VII. メラネシア・ミクロネシア区系. A. 南樺太北海道区, B. 日本温帯南部区,
 C. 日朝暖帯区, D. 満州区, E. 朝鮮区, F. 華北区, G. 華中区

Fig. 5 Floristic regions neighboring the Sino-Japanese region

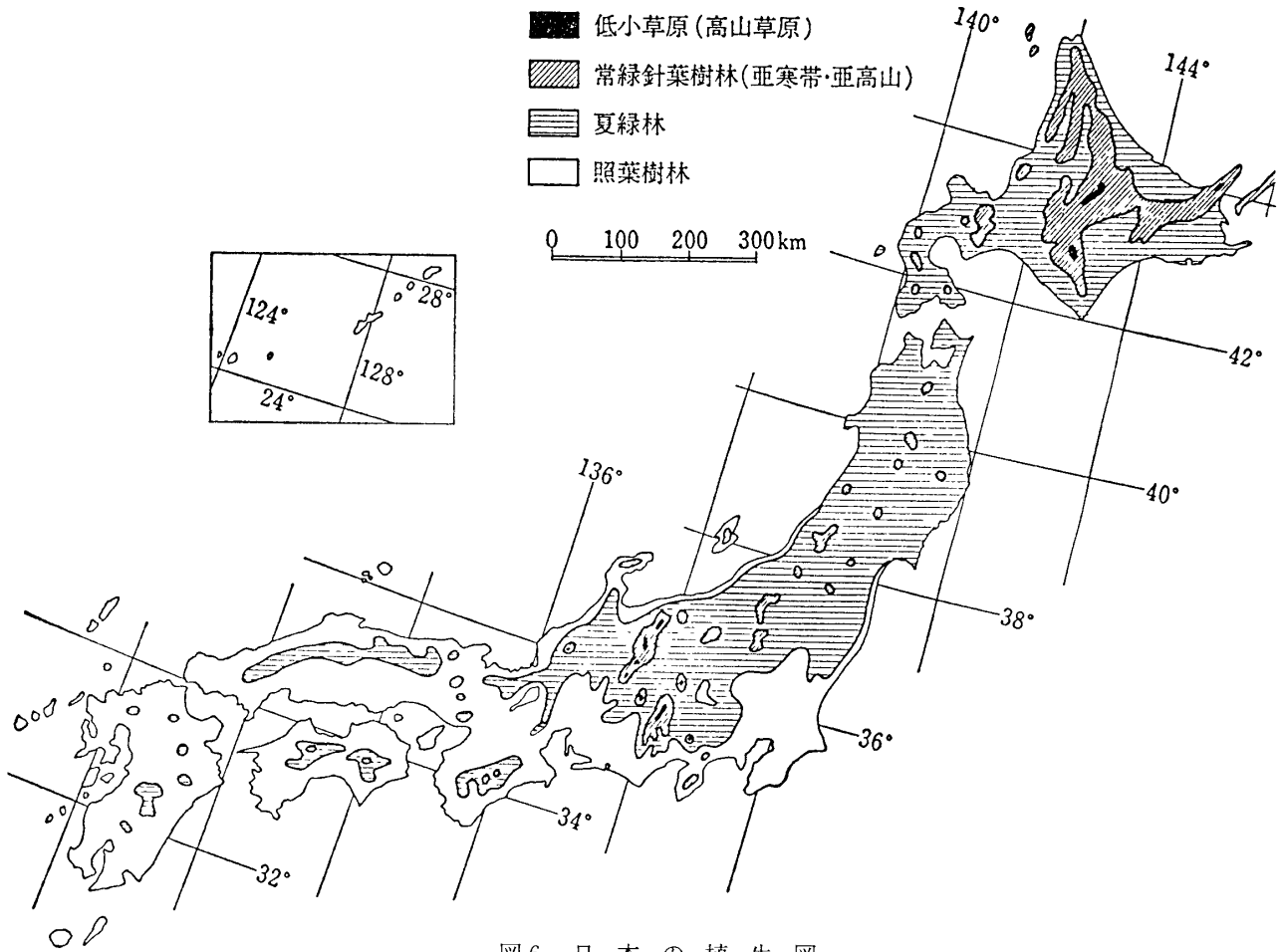


図6 日本の植生図
Fig.6 The vegetation map of Japan

立しているスダジイ・ヤブコウジオーダーで、スダジイ・ホルトノキ・ヒメユズリハ・モチノキ・アラカシ・アリドオシ・イズセンリョウ・テイカカズラ・ヤブコウジ・キツタなどを特徴種とする暖温帯のシイノキ・カシ類林であり、またこのオーダに属する照葉樹林は臨海部の低地にはスダジイ・ヤブコウジ型のスダジイ林が成立し、温暖多雨な鹿児島県・宮崎県などの臨海部には亜熱帯性のモクダチバナ・ショウベンノキ・オオタニワタリなどを含むシイノキ・タブノキ林が発達している。また、その内陸部にはスダジイ・サザンカ林、四国南部地方から紀伊半島を経て御前崎に至る太平洋沿岸地方にはミミズバイ・ヤマビワ・ヤマモガシなどの好暖地性植物を多く含むスダジイ・ミミズバイ林が成立している。これより伊豆半島や房総半島にかけても好暖地性のタイミンタチバナ・ホルトノキ・ツルコウジなどを含むスダジイ・ホソバカナワラビ群落が成立し、これより太平洋側の臨海部にはスダジイ・ヤブコウジ林が成立して北限をなしている。また、近畿地方や四国の瀬戸内地方には耐寒度の大きなカナメモチ・ナナメノキ・タラヨウなどを含むツブラジイ・カナメモチ林、東海地方の温暖多雨な臨海部にはスダジイ・ホソバカナワラビ林、その比較的降水量の少ないところにもツブラジイ・カナメモチ林、さらに降水量が多くなるとツブラジイ・サカキ林が成立している。中国地方の瀬戸内側にはシイモチ・クロキなどを含むシリブカガシ・シイモチ林が成立をみている。

日本海側においては、山口県から鳥取県にかけてクロキにより特徴づけられるスダジイークロキ林、これより北進して新潟の多雪地帯にはスダジイトキワイカリソウ林が成立し北限界をなしている。

種子島以西の琉球列島においては木性のシダ類・ヤシ類を含み、ゲットウ・クワズイモ・ヘゴなどの木性シダ類を含む亜熱帯性のスダジイークロキ・リュウキュウアオキ林、屋久島ではヤクシマアジサイ・リュウキュウリミノキ・トクサランなどによる特色づけられたスダジイークロキ・ヤクシマアジサイ林、奄美大島においてはスダジイークロキ・ハダリミノキ林、スダジイークロキ・アオバナハイノキ林、スダジイークロキ・アマミテンナンショウ林が成立、沖縄本島にはオキナワシキミで特徴づけられるスダジイークロキ・オキナワシキミ林、マテバジイークロキ・オキナワテンナンショウ林が成立している。西表島にはスダジイークロキ・ケナガエサカキ林が発達生育している。

もう一つの照葉樹林としてカシ類・タブノキなどの優占した林分がある。すなわち温暖多雨な九州・四国地方の山地にはハイノキ・イスノキ・ホソバタブが特徴的に生育したウラジロガシ・イスノキ林、本州島の太平洋側山地にウラジロガシ・サカキ林、日本海側にウラジロガシ・ヒメアオキ林、近畿地方以西にイチイガシ林が生育し、近畿地方から東海地方にかけてアラカシ・オオバジャノヒゲ林、臨海部には広くタブノキ・イノデ林が生育している。また、海岸の潮風を受ける断崖地にはウバメガシ・トベラ林、ハマビワ・オニヤブソテツ林、普通立地にマサキ・トベラ林、マルバニッケイ・ホソバワダン林を形成している。

照葉樹林文化の基盤をなす照葉樹林はこのようにシイノキ類・カシ類などのような常緑のブナ科・クスノキ科・サザンカ科の樹木を主要な構成種として成立している。しかしそれぞれの気候に適合して成立した照葉樹林も人間活動範囲の拡大とともに破壊され、各立地本来の自然植生は次第にその姿を代償植生へと大きく変貌をしつつあるのが現状である。

ま と め

近年、日本本来の原始文化をはじめ、日本固有の文化の淵源にさかのぼり、それらの根源を確かめようとする志向が多くみられるようになってきた。このような学界の動向のなかで、植物生態学や栽培植物と民族学を総合した照葉樹林文化という新しい分野が注目されてきている。

このような国際的な志向のなかで、本研究所においては1980年頃より照葉樹林文化について研究テーマに取りあげ、その予備調査が実施されてきた。すなわち中国の雲南 (Yunnan) ・貴州 (Guizhou) ・福建 (Fujian) などの各省や韓国の済州島、台湾などの海外照葉樹林帯域をはじめ、国内の照葉樹林帯域についても調査が実施されつつある。これらの基本調査の一部として照葉樹林文化の発達地域の総合的な気候状態や特性およびそれらの条件下にある地帯の確認、また、照葉樹林文化の基盤となっている植被 (vegetation cover) の生態の概況などについて、これまでの資料、調査結果を踏まえてまとめて記述を行った。本研究所の取り組んでいる照葉樹林文化の調査解明の基盤の一端になれば幸いである。各種の貴重な情報や資料を提供された滋賀県琵琶湖研究所長吉良竜夫博士、本学短期大学部学長広博士および小野所長をはじめ、平野教授、ならびに加藤主任、本報文を作成するに当たり直接ご協力いただいた大森副手などの諸氏に対し深甚な謝意を表する次第である。

SUMMARY

- 1 Recently, there have been notable tendencies to trace culture peculiar to Japan to its ori-

- gin and reveal its roots. Among them, a new field of study, 'laurel forest culture', which synthesizes ecological botany, cultivated plants and ethnology, has become the object of attention.
- 2 In our institute too, we took up 'laurel forest culture' for a subject of study around 1980, and have been making its preliminary researches since then : we have been making researches for the laurel forest zone in Japan, Chinese provinces, such as Yunnan, Guizhou and Guangdong, Cheju in the Republic of Korea, and Taiwan.
 - 3 As the basic research for these, we stated the climatic condition in the areas where 'laurel forest culture' evolves, and the general ecological condition of vegetation covers, which and the basis of life and 'laurel forest culture'.
 - 4 We are planning, from next research on, to study phytocoenosis, which is the living basis of 'laurel forest culture', in each area and to research the condition of crops and their improvement, of gathering from wild plants and of livestock and its improvement in the areas.
 - 5 The laurel forest zone is the area where forests which consist of evergreen broad-leaved lignosa are formed, forests ranging from Eastern Asia to Himalayan piedmont districts. The area is included in the warm temperate zone, where it is rainy and humid in summer.
 - 6 Laurel forests are formed within the limits of 85 to 180m. d. in warmth index.

参 考 文 献

1. 服部保・中西哲：日本の照葉樹林の群落体系について，神戸大教育研究集，1983.
2. 堀田満：植物の分布と分化，三省堂，1974.
3. 福井英一郎編：自然地理学，Ⅲ，朝倉書店，1967.
4. 石塚和雄編：群落の分布と環境，朝倉書店，1977.
5. 石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎：日本民族文化の源流，照葉樹林文化への道，中公新書，1958.
6. 上山春平：照葉樹林文化，日本文化の深層，中公新書，1969.
7. 上山春平・佐々木高明・中尾佐助：続・照葉樹林文化，東アジア文化の源流，中公新書，1976.
8. 南川幸：中部地方における照葉樹林帯の植生，日本生物地理学会報，44，東京，1989.
9. ———：中部地方に発達する照葉樹林帯の自然植生，芝草学会秋季大会講演要旨，名古屋，1989.
10. 中尾佐助：栽培植物と農耕の起源，岩波書店，1966.
11. 佐々木高明：照葉樹林文化の道，ブータン・雲南から日本へ，NHKブックス，1986.
12. 四手井綱英：森林，法政大学出版会，1985.
13. Stocker, O. Das dreidimensionale Schema der Vegetationsverteilung auf der Erde. Ber. Ber. Bot. Ges 76 (5), 1963.
14. Troll, C : Der Klima-und Vegetationsaufbau der Erde im Lichte neuer Forschungen Akad. Wiss u. Lit. Mainz. Jb, 1956.
15. 柳田国男：海上の道，定本柳田国男集，第1巻，築摩書房所収，1961.
 (付) 村松一弥：中国少数民族のその歴史と文化および現況，毎日新聞社，1973.
 (付) 竹村卓二：ヤオ族の歴史と文化，華南・東南アジア山地民族の社会人類的研究，弘文堂，1981.

中国・韓国における照葉樹林帯の植生景観
Vegetation scenes of the laurel forest zone in the People's
Republic of China and the Republic of Korea



図7 中国雲南省西双版纳ハニ族村付近の植生景観
(小野教授・1985・8・21 写)

Fig.7 A vegetation scene near Haniza Village, Xishuangbonna, Yunnan, the People's Republic of China

図8 中国福建省泉州市付近の植生景観
(小野教授・1989・4・1 写)

Fig.8 A vegetation scene near Quanzhou City, Fujian, the People's Republic of China

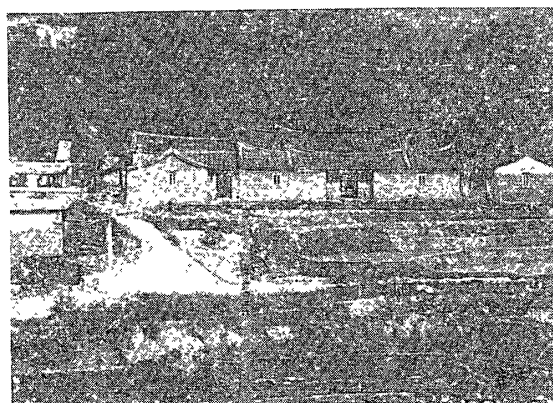


図9 中国貴州省布依族村付近の植生景観
(小野教授・1988・8・20 写)

Fig.9 A vegetation scene near Bonyeza Village, Guizhou, the People's Republic of China

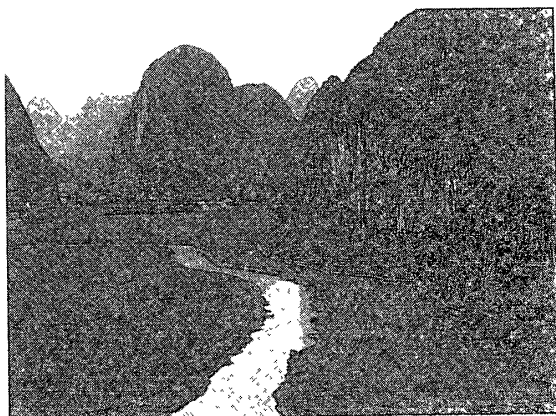


図10 韓国濟州島民族村付近にある照葉樹林よりなる
屋敷森植生景観

(加藤教授・1989・7・27 写)

Fig.10 A vegetation scene of a residence wood consisting of laurels near the folk customs, Chejudo, the Republic of Korea

